

花と食事

由布聡太郎

平熱三十六度八分の日を歩く

朝は、夜が蒸発した匂いがする

冷えた炭酸の一粒と似ている

朝食は鼻にねっとり絡みつくから食べない

家を出て生活をして、帰路につくと、喉の裏に機械油の溶けた匂いがこびりついて、

簡単な食事を作って、食べて、身体の汚れを落として、

冷えた毛布を着て、なるべく衣擦れの音が出ないように眠る

夢を見た、小さな惑星で水色とピンクが混ざりあった

沈む前の金星を見つけて

わたしは月を呑み込む

月に行こうと思ったのだけれど

「燃えてしまうよ」と魔法使いに言われたから

蠟燭を灯して、一息に消した

祝祭はあと何度訪れる、と

これだけでいいと思える日の幸福は

無効になる

向こう……

になる

の？

魔法の使い方は「知られないこと」、それだけ